

ASK ニュース

Vol.0209

2016年7月4日(月)
担当：MS事業部 山本

〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-22-21 損保ジャパン日本興亜名古屋ビル1F
ASK 税理士法人 TEL 052-971-1122 FAX 052-971-4488

株式投資

はじめに

昨今、NISA やマネー雑誌の普及により、株式や投資信託への投資に興味を持たれている方も多いと思います。しかしながら、これらの投資を行うにあたって、最大の悩みは、どの銘柄に投資するかです。今回は、銘柄選びについて考えていきます。

銘柄選びで専門家が猿に負ける？

「ウォール街のランダム・ウォーカー」という投資関連の書籍としては異例のロングベストセラーの著者であるプリンストン大学の教授のバートン・マルキール氏は、「物事の過去の動きからは、将来の動きや方向性を予測することは不可能である」という株価の予測不可能性を説明するランダムウォーク理論を提唱しています。ランダムウォーク理論を突きつめれば、目隠しをした猿に、新聞の株式相場欄にダーツを投げさせ、銘柄を選んでも、専門家が注意深く選んだ銘柄とさほど変わらぬ運用成果を上げられるとマルキール教授は述べています。

株式投資に有効なインデックス運用

株式投資においては、リスクを分散させるため複数の株式に投資することが鉄則です。複数の株式への投資として有効な手法としては、投資信託があります。投資信託には、投資専門家による運用においては2つのタイプがあります。1つ目は、専

門家が自ら調査分析を行い、有望銘柄を厳選して市場のリターンを上回る成果を目指すタイプの「アクティブ運用」と、ただひたすら市場のリターンに追随するような成果を目指す「インデックス運用」です。この両者のパフォーマンスを比べると多くのアクティブ運用はインデックス運用の成果を上回ることができません。理由としては、コストの影響です。アクティブ運用は調査や分析をする専門家など人件費が発生するためコストが高くなります。一方、インデックス運用は、ただ日経平均や TOPIX への投資をするだけですから、コストは低めに設定されています。長期投資を目的とする投資信託においては、このコストの違いで将来のリターンに大きな差を生み出します。

ドルコスト平均法

どのようなタイミングで投資すべきか悩みどころですが、この悩みを解決するのは、ドルコスト平均法です。ドルコスト平均法とは、毎月一定の金額ずつ購入することにより、価格が安いときにはたくさん購入し、逆に価格が高いときには少量しか購入しないため、結果的に安い平均取得価格で投資ができるというメリットのある投資法です。この方法は長期投資においては強い武器となります。

最後に

投資においては、まだ抵抗があるという方もいるかもしれませんが、今回、紹介した方法により投資デビューしてみてもいいのではないでしょうか。